

復樂園

デヴィッド・チルトン著
床田亮一訳

Paradise Restored: A Biblical Theology of Dominion
by David Chilton
© 1985

第1部 支配の終末論 第1章 希望

福音総合研究所

〒180-0006 東京都武蔵野市中町1-28-1 丸和ビル1F Tel. 0422-56-2840 Fax 0422-56-1591
<http://www.berith.com/> e-mail: cwi.@berith.com

目次

第1部：支配の終末論	
第1章 希望	1
第2部：預言の原型である樂園	
第2章 預言の読み方	10
第3章 樂園のテーマ	16
第4章 聖なる山	20
第5章 主の園	27
第6章 園と獣の吠える荒地	34
第7章 火のような雲	40
第3部：御国の福音	
第8章 御国の到来	46
第9章 捨てられたイスラエル	54
第10章 大患難	60
第11章 雲に乗って来られるキリスト	69
第12章 反キリストの台頭	76
第13章 終わりの日	82
第14章 イスラエルの回復	89
第15章 主の日	95
第16章 御国の完成	102
第4部：黙示録の研究	
第17章 黙示録の解釈	108
第18章 時は迫っている	113
第19章 黙示録の概略	121
第20章 獣とにせ預言者(黙示録13章)	124
第21章 大淫婦(黙示録17～19章)	133
第22章 祭司の国(黙示録20章)	138
第23章 新しい創造(黙示録21～22章)	144
第5部：地の果てまで	
第24章 宣教大命令の成就	150

第1部 支配の終末論

第1章 希望

本書のテーマは、希望です。クリスチャンが、絶望、敗北、退却というイメージで見られるようになってから、かなり久しくなります。クリスチャンは失敗する運命にあり、勝つことはできないと教える偽りの教義に、私たちはかなり長い間耳を貸してきました。つまり、キリストが再臨されるまでの間、クリスチャンは敵に対してただ着実に敗北を続けるという教えです。教会の将来は、徐々に、しかし着実に背教に向かうしかないというわけです。今日の教会指導者の中には、今は「ラオデキヤ時代」だと、悲しげに語ってくれた人もいます(黙示録3:14-22に言及のある“なまぬるい”ラオデキヤ教会のことを指します)。新たな戦争の勃発、犯罪件数の増加、家庭崩壊を示す新しい証拠など、暗いニュースが報道されるごとに、奇妙な話ですが、文明の全面的崩壊というゴールが一步近づいたとされたのです。つまりそれらは、キリストが今にもクリスチャンを助けに来てくださるかもしれないしるしとして受け取られたのでした。社会活動に関わる計画等は、懐疑の目で見られました。世界を改善しようと実際に行動を起こす人は本物の聖書信仰者ではないはずだという偏見が多かったためです。というのも、そういった努力は必ず不毛に終わる、それが聖書の教えだという信仰だったからです。それを、ある有名な説教家はこう表現しました。「沈みつつある船の上で真鍮を磨いたりはいしないものだ」。この合言葉の背後には、二つの前提がありました。一つは、この世は「沈みつつある船」にすぎないという前提、もう一つは、キリスト教の再建を目指す組織的な計画は、どれも「真鍮を磨く」ようなものにすぎないであろうという前提です。そうなると、伝道は負け戦の側に加わるように人々を招く働きにすぎません。

この思想の根底には、二つの問題がありました。一つは、「霊的であること」に関する間違った見解です。「霊的であること」に関する非聖書的な考え方によると、真の意味で「霊的」な人とは、「地上」の事柄に関わりを持たず、あまり仕事をしたり、真剣に物事を考えたりせず、ほとんどの時間を天国にいたらどんなにかいいだろうと瞑想しながら過

ごしているような、いわば「非物質的」人間の事です。しかし、その人も地上にいるかぎり、人生において主な仕事の一つあります。それは、キリストのために踏みつけにされることです。この見解に従えば、「靈的」な人とは弱虫にほかなりません。換言すれば敗北者です。ただし、少なくとも善良な敗北者なのです。聖書の教えは、これとはまったく異なります。聖書が「靈的」という言葉を使う時、たいていは「聖霊」の意味です。靈的であるとは、聖霊によって導かれたり動機づけが与えられたりすることであり、聖書に記されている聖霊の命令に従うことを意味します。靈的な人とは、空中に浮かんで不気味な声を聞く人のことではなく、聖書に語られている言葉を実行する人のことです(ローマ8:4-8)。ですから、クリスチャンは熱心に生活に関わるべきなのです。神は、われわれがキリスト教の原則をあらゆる領域に適用するように望んでおられます。靈的であるとは、人生から退却したり撤退したりするのではなく、むしろ、正しい支配(dominion)を行うことです。キリスト教の最も基本的な信仰告白は、「イエスは主である」という告白です(ローマ10:9-10)。これは、イエスが天においても地においても、すべての主であられるという告白なのです。キリストは、あらゆる領域で主として崇められ、栄光を帰せられるべきお方です(ローマ11:36)。クリスチャンの靈性という点でも、神が生活のあらゆる領域で行動を求めておられるという点でも、退却の理由はどこにもありません。

クリスチャンの行動を妨げてきた第二の障害は、「敗北の終末論」です。終末論とは、最後の事柄に関する教義であり、将来どうなるのかを教えてください。最近の多くのクリスチャンが将来をどう見てきたかは明らかです。彼らが待ち望んできたのは、敗北です。先に述べたように、世界を沈みつつある船とみなしたのです。

当然ながら、究極的な敗北を信じているクリスチャンはいません。歴史の最後に神が悪魔を打ち負かされることは、どのクリスチャンも知っています。私も、クリスチャンになってまだ日が浅い頃、聖書学校の教師たちが、聖書の最後の章をちらっと見て、クリスチャンの勝ちだ、と教えてくれたことを覚えています。しかし、これこそ本書で語ろうとしている大切な論点です。多数の支持を受けている終末論諸説によれば、勝利は「最後の章」に来て初めて実現することになっています。歴史の中で、この地上においては、クリスチャンは敗北します。この世はますます悪化しつつあり、反キリストが間もなくやってきます。この世は悪魔が支配しており、その力は常に増していきます。この世で神のために行う仕事は、わずかな個人を地獄から救い出すこと以外に、永続的な成果を残しません。しかし、唯一意味のあるそういった働きも、患難時代が来る前に急いでやっておいた方がよいのです。それは、自分自身が逃げ遅れないためです。皮肉なことですが、この福音が無意識のうちに伝えているのは、「反キリストが来る！」というメッセージです。しかし、このメッセージにはひどい偏りがあります。

つまり、私は「敗北の終末論は間違っている」と言いたいのです。この終末論は、「靈的であること」に関する間違った見解と同様に、聖書の裏付けを欠いています。聖書は敗北のメッセージではなく、希望を与えています。しかも、その希望は次の世だけでなく、この世におけるものでもあります。聖書は「支配の終末論」、つまり、勝利の終末論を与

えてくれます。これは、「すべては何とかなるものさ」といった盲目的な楽観主義ではなく、キリストの再臨前に福音が世界中で勝利を収めるようになるという、聖書を土台とした揺がない確信です。

多くの人、これを信じられないと思うでしょう。現代の風潮全体に逆らう思想だからです。長年にわたって、クリスチャンは敗北を予想するように教えられてきました。確かに、“新奇な”教義に気をつけるに越したことはないでしょう。すべては聖書によってチェックする必要があります。ただし、このことを考えてください。支配という概念は新しくはないのです。事実、かなり最近まで、ほとんどのクリスチャンは支配の終末論を信じていました。教会史全体を通じて、ほとんどのクリスチャンは、敗北の終末論を奇人の教義と見なしてきたのです。

キリスト教が全世界を制覇するという希望は、長い時代を通じて、教会の伝統的信仰でした。この事実は、様々な実例を挙げながら容易に証明できます。たとえば、4世紀の偉大な教父であるアタナシウスの言葉の中に、その信仰が見られます。その名著「神のことばの受肉について」を読むと、彼が強固な「支配の終末論」を持っていたことが分かります。アタナシウスは、その論旨を次のようにまとめました。

救い主がわれわれのただ中に来て住んでくださって以来、偶像礼拝はもはや増えなくなっただけでなく、減少の方向にあり、徐々になくなりつつある。同様に、ギリシャ人の知恵は進歩しなくなったばかりか、かつては存在したその知恵が、消滅しつつあるのだ。そして悪霊どもも、うそ、神仏御伺い、魔術などによって人々をだまし続けるどころか、人々がこころみさえすれば、十字架のしるしによって打ちのめすことができる。また、偶像礼拝やその他、キリスト信仰に反対する勢力が、日々減少し、弱体化し、没落している一方で、救い主の教えはどこでも勢いを増しつつある。そこで、救い主を礼拝せよ。すべてに優って力あるお方を。ことばなる神を。そして、このお方によって打ち破られ、消えつつある者たちを罪に定めよ。太陽が来た時に、闇はもはや力を失う。闇は、どこにも一切とどまることができず、追いやられてしまう。また、神のことばなるお方が現れた今や、偶像の闇はもはや力を失ってしまう。そして、世界の隅々が、そのお方の御教えによって照らされるのである。

アタナシウスは単に積極思考の楽天主義者で、静かで平和な環境の中でくつろいでいたからこんなことが書けたのだ、などと考えるべきではありません。事実はまったく逆です。彼が生き抜いた時代にあった迫害は、歴史上最も苛酷なもののひとつでした。当時のローマ皇帝ディオクレティアヌスは、キリスト教信仰を撲滅しようと全力を挙げていたのです。後にアタナシウスは、勢力を増す異端を相手に三位一体の教理を擁護するために、40年間にわたり、事実上一人で戦わねばなりませんでした。政府から5回も追放され、時には命の危険にさらされることもありました。事実、彼の生きざまのゆえに、「アタナシウス、世に立ち向かう (Athanasius contra mundum)」という語りぐさができたほどでした。しかし、それでも彼は世界史における根本的な事実を決して見失いませんでした。それは、ことばなるお方が受肉され、悪魔を征服し、人類を贖い、闇が打ち勝つことのできない光によ

てこの世をいっばいに照らされたという事実です。

教会が持つ支配の終末論は、ヨーロッパ文明の歴史にきわめて強烈な影響を与えました。たとえば、ヨーロッパの大聖堂を思い浮かべて、今日の教会堂と比較してみてください。そういった古い大聖堂は、数十年、場合によっては何世代もかけて造った壮大な芸術品です。いずれも、何百年も使えるような造りになっており、実際に今でも残っているのです。しかし、現代の福音派教会は通常、せいぜい一世代存続する程度の造りでしかありません。自分たち自身がその会堂を存分に使うほどこの世に長くとどまるとは思っていませんし、曾孫がそこで礼拝するようになるなどは夢想だにしていません。曾孫が生まれてくること自体、想定していないのです。子孫が今から500年後に生きているなど、ほとんどの福音派のクリスチャンは考えたこともないと言っても過言ではないでしょう。しかし、以前の時代に生きていた多くのクリスチャンにとって、将来の世代が自分たちの労働の実によって恩恵を受けるという考え方は、少しも奇妙ではありませんでした。ですから、昔のクリスチャンは長年にわたって建設を続けたのです。

ここでひとつ、がらりと変わった分野の例を挙げてみましょう。探検の話です。クリストファー・コロンブスがインド諸国への西回り航路を求めて探検した動機が何であったかを知っている歴史家は、百人に一人といません。貿易も理由のひとつだったことは確かですが、それ以上に彼の心を占めていたのは、「いまだ成就せざる預言」でした。コロンブスは探検を始める前に、イザヤをはじめとする聖書記者の引用文を自分の航海日誌にぎっしり書き込みました。その中に、世界のあらゆる国々を弟子とせよという大宣教命令が成就することを示す数多くの預言が列挙されています(たとえば、次の箇所をご覧ください。イザヤ2:2-5; 9:2-7; 11:1-10; 32:15-17; 40:4-11; 42:1-12; 49:1-26; 56:3-8; 60:1-11; 61:1-11; 62:1-12; 65:1-25; 66:1-24)。コロンブスは、もしインド諸国が改宗するのだとしたら、そこに福音をもたらすためには海路を用いた方がずっと効率がよいだろうと考えたのです。しかもコロンブスは、自分の発見は数学や地図を使用したからできたのではなく、むしろ聖霊による導きのお陰だったと述べています。イザヤが預言していた内容を成就してくださったのが、聖霊の働きであったというわけです。アメリカがそれまでに、ほかの諸文化によってすでに何度も発見されていたことを忘れてはなりません。しかし、コロンブスによる探検が始まった時代に初めて、植民地化と開発が成功したのです。なぜでしょうか。それは、コロンブスをはじめとする探検家が福音の使者であって、御国のために世界を征服することを目的としていたからです。一行は、新世界がキリスト教化されるはずだという期待を持ってやってきました。勝利を確信しており、どんな困難に直面しても、それはまさに克服を目的に神が置いてくださったものだと考えました。クリスチャンが支配権を握るようになるという定めを知っていたからです。

こういった例は、あらゆる分野にいくらかでも見られます。科学技術、医学、芸術、立憲制度、陪審員制度、自由企業体制、読み書きの能力、生産性の向上、生活水準の向上、女性の地位向上　こういった西洋文明の台頭はすべて、その原因をひとつの主要な事実に戻することができます。それは、キリスト教による西洋の変革という事実です。確かに、

その変革が未完成であることは事実です。今後も、多くの戦いが待ち受けています。しかし肝心な点は、キリスト教文明の大部分がまだ初期の段階にあるにもかかわらず、その中で神が溢れるほどの祝福を注いでくださったことです。

多くのクリスチャンは気づいていませんが、絶望と悲観主義に彩られた福音派が牛耳る現代以前に書かれた偉大な古い賛美歌の多くは、「希望」を土台としています。マルチン・ルターの「神はわがやぐら」、アイザック・ワッツの「太陽の照らすところすべてをイエスは支配される」、ジョージ・ダッフィールドの「イエスのために立ち上がれ」などを今度賛美する時に、そのことを考えてみてください。読者は、キリストが今、「すべての敵を打ち破るまで、勝利から勝利へ(われわれを導いておられる).....げにキリストは主なり」とほんとうに信じますか。これは、教会が歴史上実際に信じてきたことです。クリスチャンが賛美歌の中で歌ってきた内容なのです。これは、伝統的なクリスマス・キャロルの中に最もはっきり見られます。そういったクリスマス・キャロルは、アタナシウスの受肉に関する黙想と同様、キリストが福音によって世に勝利を収めるであろうという期待を堂々と歌ったものなのです。「来たれ、待ち焦がれしイエスよ」「久しく待ちにし」、「あめにはさかえ、み神にあれや」、「神、汝に喜びを賜わん」や、その他多くのキャロルは、基本的に本書と同じ視点から書かれたものです。「もろびとこぞりて」のメッセージの根底には、初臨の結果、キリストは今や天にあって治め、地上を征服しつつあるのだという確信があります。[以下、私訳]

罪や悲しみをもはや増やすな
地にいばらをはびこらせるな
主は溢れる祝福を注ぐために来給う
その祝福は呪いのあるところすべてに及ぶ

主はまことと恵みをもって世を治められ
ご自分の義の栄光と
愛の奇しき御業を
国々に証明させる

「天なる神にはみさかえあれ」という、勝利を歌った偉大なキャロルも、やはり同じです。

見よ。日は近づいている
預言者の語った日が
永遠に回り続ける年月と共に
黄金の時代が来る時が
平和が地のすべてに
そのいにしへの輝きを放つ時が
今、御使いが歌っている歌に
全世界が応えて歌う時が

詩篇: 支配を歌う賛美歌

教会の持つ世界観と教会の賛美歌との間には、大変重要なつながりがあります。心とくちびるが勝利の歌で満ちていれば、支配の終末論を信奉するようになる傾向があります。逆に、賛美する歌が恐れで満ちており、逃れの道を切望するような内容だったり、弱々しく子供じみた歌であるなら、賛美する人の世界観や期待も逃避的で子供じみたものになってしまいます。

歴史的に見て、教会が用いた基本的な賛美歌集は詩篇でした。詩篇は聖書中最大の書であり、だれも見落とすことがないように聖書のちょうど真ん中に配置されているのは、神の摂理による導きです。しかし、詩篇を賛美礼拝に用いている教会はどれほどあるでしょうか。教会が支配の終末論を捨てた時期と詩篇を捨てた時期とが一致していることは、注目に値します。

詩篇は必然的に、御国をテーマにしたものが多くなっています。征服、勝利、聖徒の支配といった内容で満ちているのです。また、神とサタンの戦いをいつも思い起こさせてくれるだけでなく、悪の軍勢に対して戦いを挑むように、絶えず招きます。そして、クリスチャンが地を相続する者であることを約束しているのです。教会が詩篇を歌った時代は

わずかな断片だけではなく、詩篇全体を包括的にです。教会は強く、健全で、果敢であり、破竹の勢いを持っていました。だからこそ、悪魔はクリスチャンが詩篇を歌わなくなるように、そうしてわれわれの遺産を奪うことができるように策を弄してきたのです。支配の終末論を取り戻すためには、教会を改革しなければなりません。そして、そのような改革の中できわめて重要な面のひとつは、詩篇賛美への復帰に違いありません。勝利の教会が歌ってきた歴史的な賛美歌に耳を傾けてください。

地の果て果てもみな、思い起こし、
主に帰って来るでしょう。
また、国々の民もみな、
あなたの御前で伏し拝みましょう(詩篇22:27)。

悪を行なう者は断ち切られる。
しかし主を待ち望む者、彼らは地を受け継ごう。
ただしばらくの間だけで、悪者はいなくなる。
あなたが彼の居所を調べても、
彼はそこにはいないだろう。
しかし、貧しい人は地を受け継ごう。
また、豊かな繁栄をおのれの喜びとしよう(詩篇37:9-11)。

来て、主のみわざを見よ。
主は地に荒廃をもたらされた。
主は地の果てまでも戦いをやめさせ、
弓をへし折り、槍を断ち切り、
戦車を火で焼かれた。

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ。
わたしは国々の間であがめられ、
地の上であがめられる」(詩篇46:8-10)。

すべての国々の民よ。手をたたけ。
喜びの声をあげて神に叫べ。
まことに、いと高き方主は、恐れられる方。
全地の大いなる王。
国々の民を私たちのもとに、
国民を私たちの足もとに従わせる(詩篇47:1-3)。

全地はあなたを伏し拝み、
あなたにほめ歌を歌います。
あなたの御名をほめ歌います(詩篇66:4)。

彼は海から海に至るまで、
また、川から地の果て果てに至るまで
統べ治めますように。
荒野の民は彼の前にひざをつき、
彼の敵はちりをなめますように。
タルシシュと島々の王たちは贈り物をささげ、
シェバとセバの王たちは、みつぎを納めましょう。
こうして、すべての王が彼にひれ伏し、
すべての国々が彼に仕えましょう(詩篇72:8-11)。

主よ。あなたが造られたすべての国々は
あなたの御前に来て、伏し拝み、
あなたの御名をあがめましょう(詩篇86:9)。

主よ。地のすべての王たちは、あなたに感謝しましょう。
彼らがあなたの口のみことばを聞いたからです。
彼らは主の道について歌うでしょう。
主の栄光が大きいからです(詩篇138:4-5)。

聖徒たちは栄光の中で喜び勇め。
おのれの床の上で、高らかに歌え。
彼らの口には、神への称賛、
彼らの手には、もろ刃の剣があるように。
それは国々に復讐し、国民を懲らすため、
また、鎖で彼らの王たちを、
鉄のかせで彼らの貴族たちを縛るため。
また書きしるされたさばきを
彼らの間で行なうため。
それは、すべての聖徒の誉れである。
ハレルヤ(詩篇149:5-9)。

どんな違いをもたらすのか

終末論の問題には、ひとつの根本的な鍵があります。それは、福音が使命を果たすことに成功するか否かという問題です。敗北主義の学派には、様々な相違があるにもかかわらず、ひとつの主要な点でしっかりと一致しています。それは、イエス・キリストの福音が失敗に終わるという見解です。つまり、キリスト教はその世界大の任務を果たすことができず、国々を弟子とせよというキリストの大宣教命令は、不履行に終わります。また、サタンと反キリストの軍勢が歴史を支配し、教会を圧倒し、事実上一掃してしまうのです。そしてキリストが、二流の西部劇に出てくる騎兵隊のように、最後の瞬間に戻って来られ、ぼろぼろになったわずかな生き残りを救ってくださるというわけです。

このような思想は、現実的な効果を生むでしょうか。預言のこういった解釈は、ほんとうに人生に影響を与えるでしょうか。この問いに対する答えは、すでにほとんど出ていると思います。根本的な問題は、将来に対する態度に深くかかわっています。1970年代の初期に「ジーザス・ピープル」が出していた新聞のことが思い出されます。そこには、当時最も人気のある“預言エキスパート”のインタビュー記事が出ていました。この“エキスパート”は、キリストがご自分の教会を“今にも”携挙されるという“事実”をもとに、自分の若い信奉者に対して、結婚したり家族を養ったりしないように実際にアドバイスしていました。結局、そんなことをしている時間はないのです。携挙が近づいているので、正しい支配を行うための働きはすべて無意味なのです(悪魔の立場になって考えてみてください)。神の与えられた勝利のご計画をクリスチャンに捨てさせるのに、これ以上に上手な、靈的な響きのする言い訳が考えられるでしょうか)。当時の“携挙の倫理”が与えた影響で、多くの人が学校をやめ、仕事を辞め、家庭を去り、といった具合に、無責任な生き方をするようになりました。「ジーザス・ピープル」の群れは、目的もなく、国中を放浪しました。この群れは、目先に迫っているクリスチャン・ロックコンサートについて考える以外は、何もはっきりした目標を持っていなかったのです。彼らの多くが、目覚めるまでに何年もかかりましたし、場合によっては、元のまともな生活に戻るのに、さらに何年も要しました。

実際のところ、社会を変革できると信じないかぎり、社会を変革するように働こうとはしないものです。同様に、キリスト教文明が実現可能であると信じないなら、キリスト教文明を建設しようとはしません。初期の宣教師は、軍隊の先頭に立っているかのように、異教の地ヨーロッパの果てまで、おそれず大胆に踏み込み、福音を説き、悪霊を追い出し、偶像を砕き、国全体を回心に導きました。そのようにして、多くの者をキリストの足もとにひざまずかせたのです。その勇気を与えたのは、キリスト教信仰が必ず勝利を収めるという徹底した確信でした。自分たちが勝つことを知っていたのです。福音の使者たちは、戦いの中で自分の命を捨てることもできました。それは、歴史が自分たちの味方であること、そして、クリスチャンの軍隊が前進するごとにサタンの領土が日々打ち砕かれ、不法に築かれた要塞が弱体化しつつあることを確信していたからです。宣教師たちは、福音の

力に関する悲観的な考えは毛頭持っていませんでした。神は、ご自分の約束を信じる彼らの信仰を重んじられ、後の日にいつか全世界に行きわたるキリスト教圏の土台を築く力を与えてくださったのです。

神の民が神に従わず、不信仰に陥る時、教会はサタンとの戦いに負け始めます。それは、勝利の希望が間違っていることのしるしでしょうか。いいえ、決してそんなことはありません。個々のクリスチャンの霊的成長と同様、社会の霊的成長も決して自動的なものではないと聖書は教えています。「私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です」(Iヨハネ5:4)。クリスチャンは、生活のどの領域においても成長が自動的に生じるとは考えません。どんな成長も発展も、神の御霊が主権的にお与えになる賜物です。しかしクリスチャンは、何もかも努力をやめて神に委ね、食事も運動もやめて、それで成長できるなどとは言いません。同様に、神に信頼することをやめ、祈りも服従もやめ、なおかつ恵みのうちに成長できるなどとは考えないのです。また、何らかの不従順な行いが個人の終末を決定し、自分はクリスチャン生活において必ず失敗する運命にあるなどと考えるべきではありません。同じことが、文化の聖化についても言えます。私たちは、文明が“自然に”進歩するなどとは信じません。文明の盛衰は、神の祝福しだいで決まります。そして、神の祝福とは、契約の遵守に対する神の人格的かつ契約的(“自動的”ではない)応答なのです(申命記28章)。

キリストは次のように命令されました。

あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい(マタイ5:13-16)。

これは、全世界の社会変革を完全に実施せよという命令にほかなりません。しかも、キリストがここで非難しておられるのは、自分の周りの社会を変えることのできない、効き目のなさです。神は、いつかすべての人が神の栄光を現すようになる、つまり、キリスト教信仰に改宗することを目指して生活せよと、クリスチャンに命じておられます。要するに、教会が従順であるなら、世界中の民や諸国がキリストの弟子となるのです。私たちはみな、すべての人がクリスチャンになる義務を負っていること、あらゆる国の法律や制度が聖書の青写真に従わねばならないことを知っています。しかし、聖書の教えていることはそれだけにとどまりません。聖書の教えによれば、このような命令が将来の有様を決定してしまうというわけです。クリスチャンは、世界を変えねばなりません。いや、それだけでなく、世界を変えることになるのです。